池田孤邨試論

―新出の「紅葉に流水図屏風」と「江戸近郊八景図画帖」を中心に―

岡野智子（細見美術館）

江戸琳派の画家、池田孤邨（1801～66）は、酒井抱一の高弟の一人で、いくつかの優れた作品が知られている。しかし、同じ抱一門下で５歳年長の鈴木其一（1796～1858）が多くの弟子を擁し、其一派ともいうべき一派を成して近代までその足跡を残したのに対し、孤邨についてはわずかな手掛かりしか知られず、その全容を見渡す研究はこれまでになかった。其一に比べ作品数が少なく、また作品ごとに大きく作風が異なること、その生涯に関してもほとんど未詳であることなどが、この画家を捉え難くしてきたと思われる。

けれども孤邨の存在感は其一に並び大きく、江戸琳派研究が多方面から行われるようになった今日、孤邨についても詳細な検討が望まれる。発表者はかねて、孤邨の出生地越後水原の調査を度々行うとともに、展覧会開催などを通じて多くの孤邨作品を実見した。本研究は、断片的に語られてきた孤邨のプロフィールや研究史を整理しつつ、このたび新出となった「紅葉に流水図屏風」と「江戸近郊八景図画帖」を中心に、孤邨の全容究明の足掛かりを築くものである。

まず「紅葉に流水図屏風」（個人蔵）は安政３年（1856）の箱書を有し、孤邨５６歳（数え年）にして最大級の作品である。６曲１双屏風の表面に極彩色で紅葉に秋草、流水を描き、裏面には墨画山水図が配される。紅葉の描写には『光琳百図　後編』掲載の光琳画縮図や、同図に基づく抱一の「青楓朱楓図屏風」などが想起され、光琳様式を基盤とする。一方、水際の秋草はいずれも抱一の「夏秋草図屏風」に明らかに影響を受けている。孤邨らしいリアリズムも随所に発揮され、まさに孤邨の集大成ともいうべき多様性と迫力に満ちた作品である。

次に、「江戸近郊八景図画帖」（個人蔵）は本紙各縦 7.2 ㎝、横 8.9 ㎝の画帖で、絹本８面に江戸の近郊八景を描く。「煉心」の印があり、これも孤邨晩年期の作と知られる。小画面に複数の「名所」を取り上げるという構成や、細密で丁重な描写は、酒井鶯蒲筆「近江八景図巻」、同「六玉川図巻」、鈴木其一筆「四季歌意図巻」に通じ、顔料の質、箱や題箋の仕様、其玉の箱書などが近似する。この８図はまた、歌川広重の版画「江戸近郊八景」（1838 年頃）に名所の全てが一致し、構図を借用していることも判明した。

この重要な２件の出現を踏まえ、本発表では、孤邨の有年紀作品・資料や落款の特徴から画風展開を年代を追って推定する。ここに孤邨画の特質、画風形成の様相が初めて明らかにされる。江戸琳派における孤邨の位置づけが明確になることは、抱一・其一研究に新たな視点をもたらすものである。さらに孤邨画には広重や文晁作品との接点も指摘され、幕末期に向かう江戸画壇の動向の一端も示し得ると考える。孤邨が葛藤の末に辿り着いた境地に迫り、その豊かな個性の意義を顕彰したい。